

幸綱 少し前から話したほうがいいと思う。シンポジウムという言葉や型式が歌壇には一九六〇年代に入ってきたんだよね。

一九六二年に岐阜で「全国青年歌人合同研

究会初夏・岐阜の会」が開かれた。郡上の「古今伝授の里」の産みの親・小瀬洋喜さん、

この人は自然科学者だったんだけれど短歌もやつていて、彼なんかが提唱して始まつたんだね。俺は第一回は行っていない。第二回は同じ年に神戸でやっています。その時、僕と寺山修司と平井弘の三人が同じ部屋に、寝ただよね、確か。

黒岩 それ、すごいですね。

幸綱 寺山修司が「神戸のストリップはすごいらしいから行こう」なんて言つて、俺と寺山修司が行つた。そんなことがあつたな（笑）。

奥田 平井さんは行かないんですか。

幸綱 行かなかつたと思う。そんなかたちで始まつて、六〇年代はシンポジウムの時代になつた。七回くらいやつたかな。名古屋の会の集合写真が残つている。名古屋の時の参加者のサインの色紙を小瀬さんが持つていて、いま、古今伝授の里にある。一昨年だつたが、小瀬さんの奥さんが寄贈

されたのかなあ。見せて貰つたんで俺のブログに写真を貼つておいた。

冒頭の一九七六年のシンポジウムはその流れだね。東京は「現代短歌シンポジウム」の第三回かな。二回目はたしか大阪でやつた。「男歌、女歌」というタイトルで、女歌の代表が馬場あき子さん、男歌の代表は僕で、かなり話題になつた。

ちょうどそのころ、中上健次が台頭してきた、歌壇でも話題になつていた。最初は誰が親しかつたのかなあ。立松和平君は早稲田文学の関係で早くから知つていた。中上君とはそのときが初めてだつたと思いま

す。中上は短歌に興味を持つていて、僕

の本をずいぶん読んでくれたと言つてました。会場は新宿区大久保の俳句文学館だつた。そのとき、パネリストたちの水差しに酒が入つていて。今日の「ほろ酔いイントビューア」みたいに、みんな飲みながらガングンやつたんだ（笑）。

黒岩 そこから始まつてののかー。それを真似してですよね、その後、「心の花」の全国大会でも晋樹さんや小紋さんが水のふりして酒を飲みながら…。

幸綱 いや、どつちが先だつたか、わから

ないよ。まあ、そういう、ちょっと粹がつている時期で、われわれは三十代の終わりだつたかな。中上君は二十代の終わりぐらいで、そういう時期だつたんだね。

中上君も立松君も二人とも短歌に興味を持っていた。というか、当時、わりと短歌が時代の前のほうに行つていて。前衛だね。その前の時代は詩が前のほうに行つて、次に短歌が前になつたそんな時代だつたと思いますね。

先日亡くなつた演出家の蜷川幸雄さんの写真を見たら、本棚の前に座つているんだけど、塚本邦雄や岸上大作の歌集が並んでいた。僕の歌集はなかつたんですけどね（笑）。演劇、小説とかで、わりと先端的な仕事をやつていた人にとって、同時代の短歌が面白いという時期があつたんだと思う。そういう時代だつたから、中上、立松もずいぶん短歌を読んでいたんだと思う。一人とも、短歌に詳しいのでびっくりしたのをおぼえている。それから、中上君とはいろいろなたちで接した。僕も中上の作品を面白く読んでいたのでね。

黒岩 ああ、そのような経緯があつたから、前回、話題になつた新宿での大立ち回りの